渋沢栄一物語 Shibusawa Eiichi History

【第14回】

幕府瓦解する

慶応四年（一八六八）正月二日、パリの昭武の下に幕府からの御用状が届き「政態変革之儀」を知らせて来ます。続いて二月十三日、同じく御用状が届き、遂に政変の次第を報じ、ここにようやく幕府瓦解が明らかとなりました。

その後、日本では昭武の水戸徳川家相続が決まり、新政府は一行に帰国を命じます。

昭武の個人的留学に付き添いながら、自分でも何か勉強したいと思っていた栄一ですが、今やそれもはかない夢と消えました。

同年八月三十日、昭武一行はパリを後にし、帰国の途に就きます。十一月三日、横浜に着港。幕府関係者数名が出迎えただけの寂しい帰国となりました。

栄一は、一行中の俗事係として、帰国にかかわる事務万端を取り仕切る立場であり、昭武の水戸徳川家相続のための準備も加わり、すこぶる多忙を極めました。

そうした中、栄一は、江戸で父の市郎右衛門との再会を果たし、いとこたちの消息を確認します。尾高長七郎はすでに死亡。渋沢喜作も、鳥羽・伏見の戦いに従軍した後、江戸へ戻り、上野寛永寺に謹慎する慶喜を警護するために彰義隊を組織します。慶喜の水戸退隠を見届けるとこれを脱退し、尾高惇忠やその弟平九郎らと新たに振武軍を組織。飯能で官軍を迎え撃ちますが、あえなく敗退しました。喜作と惇忠は無事落ち延びましたが、平九郎は行方不明のままでした（後日越生黒山で自刃して果てたことが判明します）。その後喜作は、幕府海軍を率いる榎本武揚の軍に投じ、榎本とともに函館の五稜郭にこもったまま、官軍と敵対していました。

徳川宗家はといえば、わずか七十万石をもって静岡に存続を許され、市中宝台院には今や朝敵の汚名をこうむったままの慶喜が蟄居謹慎しています。

栄一は、自分の人生はもはや終わったと考え、今後は、慶喜の側近くにいて、陰ながらその行く末を見守りたいと、静岡に向かいます。

（文：新井慎一）

▲栄一の遠欧に際し、見立て養子となった渋沢平九郎

物語の手引き

『彰義隊』

戊辰戦争の時、江戸上野で新政府軍と戦った旧幕府軍。1868年2月、渋沢成一郎（喜作）を頭取、天野八郎を副頭取として結成されました。江戸城明け渡し後、上野の山に立てこもりました。同年5月、大村益治郎が率いる新政府軍の攻撃により壊滅しました。

『榎本武揚』（1836-1908）

江戸末期の幕臣・政治家。オランダ留学後、幕府の海軍副総裁。江戸開城後、幕府の艦隊を率いて、函館の五稜郭に立てこもり新政府軍に反抗しましたが敗れます。後に北海道開拓に従事します。1874年特命全権大使になり、ロシアとの間に樺太・千島交換条約を結びます。逓信・外務・文部の各大臣を歴任。

※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。

キラリ 熱・中・時・間

和の風情守る匠の技

～鬼板師　塚越久義さん～

日本家屋の屋根を飾る鬼瓦。その造形を生み出す職人は「鬼板師」と呼ばれます。全国に60人ほどしかおらず、県内でも専門にやっている人はわずか3人。そのうちの1人が七ツ梅酒造跡地内に手作り鬼瓦工房「鬼義」を構える塚越久義さんです。

塚越さんと鬼板師との出会いは23歳のころ。サラリーマンとして働いていましたが、「自分が本当にやりたいものは何か…」と模索する日々でした。そんな折、恩師の家を訪ねると鬼瓦が目に入ります。「魂が引き寄せられた」と言う塚越さんは、すぐに小川町在住の現代の名工富岡昭氏に師事します。1年間は仕事をしながら週末に通いましたが、「月に数回では育たない」と言う師匠の言葉に一念発起。仕事を辞め、本格的に鬼板師への道を歩み初めました。

5年間の修業期間を終え独り立ちした塚越さんですが、鬼瓦だけではなかなか食べていけないと言います。活動の幅を広げようと、鬼瓦製作の技術を凝らした置物や表札などもオーダーメイドしています。今年は、陶芸財団展に狛犬を出展。インテリア部門で見事入賞し、6月から7月にかけて国立新美術館で展示されました。

「納得いかない物は出したくない」と話す塚越さん。現在でも週に1度は師匠を訪ね、その技に少しでも近づこうと研鑽を積んでいます。「まだまだ、修行の身。まずは伝統を受け継ぎ、その上で新たな表現方法を見つけていきたい。」その真摯な言葉に、日本の伝統風景を守る強い意志を感じました。

▲瓦灯を製作している様子
鬼瓦工房「鬼義」は6畳ほどの広さ。作業場でもあり、これまで塚越さんが製作した作品を見ることもできます。

ありがとうの手紙

優秀賞
小学校低学年の部
はんちょうさんへ

上柴西小学校2年（現3年）　青柳大智 さん

一年生の時の雨の朝のことです。ぼくは水たまりでズルッとすべって、ころんでしまいました。Tシャツもズボンもびしょぬれで、「どうしよう。」と思って、なき出しそうになりました。するとはんちょうさんが「大じょうぶ、家にもどろう。」と言って、家までいっしょに来てくれました。お母さんのかおを見たら、なみだが出てきました。

はんちょうさんありがとう。ぼくも六年生になったら、やさしいはんちょうになりたいです。

情熱農力

夢の味を目指して

青木 崇通さん（36歳・櫛挽）

青木さんは肉牛農家の3代目。数あるブランド牛の中で、市内で唯一『夢味牛』を生産しています。夢味牛はさっぱりとした脂が特徴。餌の配合で脂の味が変わるといいます。

現在は230頭を飼育し、年間約150頭を出荷。品評会でもたびたび入賞しています。「ブランドとしてはマイナーですが、良い物を提供し続けることが大切。そのために、自分の目が行き渡る規模で、1頭1頭手を掛けてあげたいですね」と話してくれました。